

国語学史

佐田智明

一

国語学史の研究を展望するにあたり、まずその研究領域について一言述べておきたい。

言われるごとく、国語学史を学説史研究に限れば、古代・中世の事項はほとんど対象外となるし、絶対的価値基準を適用すれば、近世のものでもほとんど残らない。となれば、学問自体にとっても自縄自縛となるおそれがある。国語に対する意識の歴史と規定すれば、国語観につらなる有意識的記述が対象となってくる。ただし、中世以前では断片的、かつ非体系的である。それらは常に文語理解、すなわち記述者の古語把握の体系そのものと微妙に関連し、同時に当代口語を背景に持つ存在である。学史研究が、記述者の内面に入って、そこから学説の展開の過程を引き出す必要を偶有しているとするれば、古代人の言語観の成立・展開は、前記の点を考慮して、その規範意識を介しつつ引き出されねばなるまい。

近世以降においても方法的には異なる所はない。学説自体の成長に従って、体系的な面が大きくなって、依然国語意識に関する洞察は必要であろう。この場合、学史研究者と、その対象たる記述者

との合作になる研究に変じないよう自戒したいと考える。

つまり、国語学史研究は、基本的には日本語に対する意識的発言をなした資料、とくに体系的な記述を対象とし、その基盤たる学問的環境等に留意しつつ、それらの記述ないし学説の形成・成立・展開の様相を追究することにある。ゆきつくところ、国語学史は、研究者の史観にもとづく対象事項の評価を伴うものではあっても、少くとも近世以前では、充分なる実態記述と解釈が先行するのが現状である。かかる視点から、国語学史が国語史とかかわり、相互に寄与する道がひらけてくると思う。

二

この二年間の研究動向を見るに、次のような特徴が認められた。

①本居学派系統の研究が中心である。②系統的通史研究が著しくなつた。③影印資料が数多く刊行された。以下例によって単行本から触れてゆく。

江湖山恒明『上代特殊仮名遣研究史』（明治書院、昭53・1）、島田昌彦『国語における自動詞と他動詞』（同、昭54・4）、杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅲ——対訳語彙集および辞典の研

究——(早大出版、昭53・3)。いずれも通史的研究になる大著である。「上代特殊仮名遣研究史」については、馬淵和夫氏の書評に譲る。(『国語学』114)なお言えば、橋本進吉の条など、故人の思考過程、学的環境を細かくあとづけしようとする点、掬すべきであろう。同氏「拙著の補訂」(『鶴見大紀要』16、昭54・3)も参考になる。

『国語における自動詞と他動詞』は、「一步」から佐久間鼎まで自他の認識の史的展開を叙述、次いで詞の通路の自他説を特立詳述し、春庭の論を称揚する。明治以降の字説が、西洋文法的発想に影響されて国語に適しない二値的見方をしようとする点を厳しく批判する。この研究は、自他にかんする叙述を引用し、論評しつつ展開されており、詳密で着実な実証を伴なう。国語の自他論は多いが、通史的な研究に立った氏の識見はひとときわ重厚である。なお加えれば、成章と宣長から春庭への質的転換、すなわち自他論が動詞中心に転じたとき、国語研究の重要な部分が除外された事を無視できない。記伝その他の自他の記述を含めて、その間の事情を明らかにしたい。また、「る・らる」など所謂関係構成にあずかる語群の問題、自他↓人称↓待遇表現あたりの説の扱いに不明確なものを見受けられた。

『蘭語字の成立と展開』は、蘭語・蘭文の形態・構造を中心とした研究についての考察につづく第三部で、蘭学者たちの訳編にかかると語彙集辞典についての全体的展望と史的考察である。第四部をも予定されており、いずれ別途に書評が行なわれるであろう。同氏の論文集『杉本つとむ日本語講座1〜7巻』(桜楓社、昭53・12)があり、異体字・方言・蘭語学などに分けて再編、補訂を加えてあ

て、参考になる。

国語学会編『国語学史資料集——図録と解説——』(武蔵野書院、昭54・4)は紹介済み、『国語学』118、前田富祺氏。とりあげられた資料名は、学界での学史研究領域に対する通念の所在を示すことになる。西田直敏『資料日本文法研究史』(桜楓社、昭54・4)もテキスト用、各資料に簡単な解説をつけあり、便利である。このほか学史にもかわる研究として、山田俊雄『日本語の辞書』(中公新書、昭53・2)、小松英雄『いろはうた——日本語史へのいざない——』(同、昭54・10)をあげておきたい。

以上のほかの単行本は雑誌論文にふれるなかで必要に応じて紹介する。記念論文集所収のものも同様に扱う。

三

雑誌論文に移る。まず文法に関するもの。

尾崎光「手爾葉大概抄の伝流について——鈴木辰から時枝学説にいたる——」(愛知歳『文学論集』27、昭53・3)は大 概抄のテニハの概念を検討し、ことばの中に、詞的、テニハ的二要素があると考えたこと、この考えが鈴木辰・時枝誠記と根源において通じると説かれる。しかし、三者同一ではない所に重要なカギが秘められていたのであって、根来司氏は、大概抄に云うテニハの表現論的な部分を切捨てていった所に時枝説が成立したと云われる(『手爾葉大概抄 手爾葉大概抄之抄』、和泉書院、昭54・8、解説)が、なお問題は残ると思う。

佐藤寛男『古今和歌助辞分類』とテニヲハⅢ、——『助辞の疑はしきもの』について——(『藤女子大・藤女短大紀要』15—1、昭53・1)、「古

今和歌助碎分類の分類意識」(同上16—1、昭54・1)、前者は当代諸説と対比しつつ論じ、注釈的意義をも有する研究。後者は分類意識と史的位置づけを試みる。童翫抄、八重垣など氏の労作によって成章・宣長以前のテニハ研究が次々に明らかにされている。今後は一層の深化が期待される。

新川正美「てには綱引綱と稿本あゆひ抄——稿本あゆひ抄ノート——」(香川大『国文研究』4、昭54・9)は、あゆひ抄の研究があびきづな説を意識してすすめられたことを内部徴証から証しようとする。積極的なきめ手が欲しい所であろう。

成章関係では同氏「富士谷成章と本居宣長——あゆひ抄の継受容について——」(香川県高国研『国語』31、昭53・11)へ香川大国文にも同じテーマの研究がある。Vは、「うちあひ」、「靡・靡伏」などの説は、成章学説の必然的發展であるとし、水野清「鈴木胤による宣長・成章・両学派の合流」(『文真』1)を批判する。穏当な意見であるが、成章が紐鏡を意識していなかったかどうか、両者の関係がなぞに包まれているだけに、まだ論議を呼ぶ問題であろう。カイザー・シュテファン「『あゆひ抄に於ける品詞『事』について』(『国語と国文学』56—3、昭54・3)は、成章のワザ・事の違いをめぐって、動詞の下位分類たる「ワザ・勢・思」に注意しつつ、学説の発達過程を見る。ワザ消滅の理由など考えたい点があり、総じて竹岡説の枠から多く出していない。

宣長については、尾崎知光「本居宣長の初期てにをは研究への過程」(愛知県大『文学論集』28、昭54・3)は、明和以後、二十一代集校作業の中で、宣長のテニハ説とくに係結び説が形成されたことを、「玉の緒稿」との関連から説く。誠に注目すべき研究で、

詳細な跡づけを期待したい。湯浅茂雄「古事記伝における体・用・辞」(上智大『国文学論集』12、昭54・1)は彼の文法論的認識の高まりを指摘する。既に故笹月清美氏の「本居宣長の研究」ほかの研究があるテーマであるが、氏は数量的処理を加えて認識の度合を見ようとした趣である。体系化面での宣長の欠除はしばしば指摘される所であるが、体系に関する数多のヒントが後字に託されたという傾向を認めることは許されよう。高瀬正一「古今集遠鏡と詞の玉緒について」(愛知教大『国語国文学報』35、昭53・3)は、玉緒の説と例証歌を遠鏡の同一歌の俗語訳と比較する。かかる場合、両著の成立年代の差、論と訳とでの表現差がからんでくる。ともあれ、尾崎・湯浅氏の方法と並んで、宣長に迫る重要な一方法であると考えられる。

「詞つかひ」については、渡辺英三氏の着実な研究が続けられている。氏は同書の翻刻を『富山大教育字部紀要』25(昭52・3)、26(昭53・3)27(昭54・3)へ継続中Vに発表される一方、「詞つかひ」の天語・地語・春語・秋語」(北大『国語国文研究』61、昭54・2)、「所語・有語・令語の論——詞つかひの活用体系——」(『文真』4、昭54・8)を発表された。常昭が、天・地より春・秋へと研究を進展させ、春・秋に属する所・令・有語を動詞活用の形態変化形と共に意義に應ずる添加(形)として一活用表に位置づけたことなど論じ、紐鏡と春庭をつなぐ本書の位置を確かめようとした。

春庭では、島田昌彦「本居宣長『詞の通路』の詞天尔乎波のか、る所の事」(『中田祝夫博士国語学論集』、昭54・2)は、春庭の文構造論として、標題にかんする春庭の証例を帰納し、かかりかたに一定の基準を認めていると論ずる。春庭説と島田説との境界が不明な点

もある。ほかに尾崎知光「道邇佐喜草は春庭の著に非ざること」
『国語と国文学』、昭53・7）は鮮やかな論定。

鈴木服関係では「文莫」3・4号中心に論考が多い。佐藤茂「鈴木服」についての寸感（『文莫』3、昭53・7）は服研究現況からさまざまな問題を提起する。水野清「鈴木服の借書簿」（『文莫』4、は基礎資料。その他同誌に資料紹介がなされる。単行本で、杉浦豊治「鈴木服——人と学問」（鈴木服学会、昭54・6）には離屋学訓とその附釈がある。篤胤との関係にも言及する。なお竹本表明「てにをは紐鏡から詞の八衝まで」（『高大国語教育』26、昭53・12）もある。緻密な実証が俟たれる論。

近世末期では、小山やす江「義門の国語研究とその言語観」（『早大』国文学研究』66、昭53・10）は、義門が国語自体を明らかにしようとする研究態度であったことを指摘し、定格よりもてにをは法則の不変性を確信したことを述べる。歴史的把握の定着について論証すれば、説得力が更に大きくなったであろう。寺田泰政「国学者鱸有飛の助辞研究——助辞本義について——」（『田辺博士助詞助動詞論叢』、桜楓社、昭54・8）は氏の鱸氏研究の一つ。島田昌彦「横山由請『活語自在』の自他」（金沢大『法文学部論叢』25、昭53・2）は前出、同氏者に入られた。春日和男「幕末における九州の万葉字——種信と広足——」（九州文化研究所紀要』23、昭53・3）は、中央の国学者との交流、広足ほかの学問を説いておられる。中村幸彦「擬古文論」（『春日和男教授』退官記念語文論叢』、桜楓社、昭53・11）には、近世の文章研究史上の多くの課題が提示される。

以上のほかに近世国語学史資料が、勉強社文庫として影印され（それぞれに解説が附される）、また『漢語文典叢書』6巻（波古書

院）が出て、ともども、研究上の利便がはかられることになった。

四

明治期以降の文法研究では、第一に、森岡健二「明治期文法論の成立——西洋文法と対比の問題——」（上智大『国文学論集』12、昭54・1）を挙げたい。「明治の文法論は西洋文法と対比対照する作業を通して組織化された」とし、その主要な学説、大槻・山田・松下文法にしばって検討された。さらに大正期以降は、これら既成の文法学説を検討して組織される。例えば、時枝説は、言語過程説によって山田文法を再解釈したものと云う。このような総合的巨視的視野に立った明治文法論の通史的研究である。

個々の学説研究では、松下文法の史的再評価の試みが著しい。清水彰「松下文法の位置」（『武庫川国文』14・15、昭54・3）は橋本・時枝理論との関係より論じ、小矢野哲夫「松下大三郎のアスペクト・テンス観——日本語文典と改換標準日本語の違い」（『東北大学芸文研究』90、昭54・1）は学説展開を追う。徳田政信「日本語文典の特色と史学的意義」（『中京大』文学部紀要』14—1・2、昭54・10）、仁田義雄「松下大三郎の文法理論」（『京都教大紀要』A・55、昭54・9）は位置づけが主眼。仁田氏のは、「橋本進吉の構文論——橋本国語の言語学史的立場をめぐって——」（同上54、昭54・3）などとともに氏の近代日本文法理論考察の系列に入るものと云う。以上の諸研究は、いずれも森岡氏の論点と併立する面があり、同時に研究者自身の文法理論と連続する性格をもつ。

さて、特定品詞を扱ったもので、鈴木一彦「教科文典における『接統詞』」（山梨大『国文学論集』17、昭54・3）、吉沢典男「訳語と

して見た『助動詞』(田中博士古稀記念助動詞論叢、昭54・8)は西洋文典の適用から生れた品詞をとりあげる。他に、尾上圭介「助詞『は』研究史における意味と文法」(『神戸大文学部三十周年記念論集』、昭54・10)は、近世以降の「は」の認識を通史的にとりあげる。

外国人の日本語研究では、松下洗司「中世の日本文典——ラテン文法の日本語への適用をめぐって——」(上智大『国文学論集』12、昭54・1)は、アルバレス・ロドリゲス・コリヤード文典が、一般文法的見地から、ラテン文法に対応する日本語形を求めるといふ方式が記述されるが、コリヤードのみ、文語の除外等でやや異なった面をもつと説く。これに対し阿部健二「J・ロドリゲス著『日本小文典』の国語学的価値」(『国語と国文学』56—4、昭54・4)は、小文典の国語学史的価値を、下一段「蹴る」の発見、動詞活用の扱いの進展などで示した上で、ロ氏が日本語探究という態度に変じた点を指摘する。なお、氏は「小文典試訳稿」を発表されている。(新潟大『国文学会誌』20、及び同人文科学研究、昭53・3)。

近代では、古田東朔「アストンの日本文法研究」(『国語と国文学』、昭53・8)、欧人の近代文典のなかでのアストンの位置づけを決定する。同氏「ホフマン『日本文典』の刊行年について」(学習院女短大『国語国文論集』7、昭53・3)は一八六七—七八年に刊行されたとする同書の出版経緯を論証する。ほかに桜井美智子「言語学の明治草創期における B・H・Chamberlain」(東京女大『比較文化研究所紀要』39、昭53・1)をあげておく。

五

語彙に関する研究については、展望の性格を考慮し、国語学史の

対象を広めに解して、関連するものを扱う。まず辞書を扱った研究を並記する。

福田益和「篆隸万象名義の部首配列について」(『春日記念』、昭53・11)、井野口孝「新撰字鏡『玉篇群』の反切用字」(『文学史研究』、17・18、昭53・4)、林史典「法華経音義における字音分類について」(『中田記念』、昭54・6)。三宅ちぐさ「七卷本世俗字類抄にみられる出典注記」(岡山大『国文論稿』6、昭53・3)。安田章「和漢聯句と韻書」(『論集日本文学・日本語』3、角川書店、昭53・9)、同「韻字の書」(『国語国文』、昭53・1)、『語学研究資料としての通俗辞書』(『国語と国文学』、昭53・5)、大友信一「韻書の系譜」(岡山大法文、学術紀要』39、昭53・12)。木村秀次「新刊節用集大全考(一)——その引書をめぐって——」(『言語と文芸』85・86、昭52・12、53・6)、高梨信博「『和漢音釈書言字考節用集』の考察——版種を中心として——」(『国文学研究』64、昭53・2)、「和漢新撰下学集和漢初学便蒙の考察」(『国文学研究』69、昭54・10)、杉本つとむ「雑字類編」小考——その成立と影響——(『国文学研究』64、昭53・2)。古屋彰「世話字尽と節用集——一つの改編の例をととして——」(『金沢大法文』、昭53・2)。粕谷宏「石川雅望『雅言集覽』の出版経緯について——『慶元堂書記』を中心に——」(『日大』『語文』44、昭53・3)。

蘭学関係では、蘭学資料研究会編「『算作阮甫』の研究」(『思文閣』、昭53・4)Ⅱ分担執筆になるもの。滝川義一「木村兼葎堂の蘭学志向——語学を中心に——」(『国学院雑誌』、80—9、昭54・9)、片桐一男「和蘭点画考補と西文訳例」(『青山大文学部紀要』19、昭53・3)、杉本つとむ「『五国語箋』の小察」(『解釈』24—2、昭53・2)その他がある。訳語の面から追ったものに、岡田袈沙男「和蘭字彙

とその音訳語の研究』(『国文学研究』64)。飛田良文「訳語研究の視点」(『国語学』115)がある。

このほかで、秋吉望「万葉集附属語にあらわれた語意識について」(『語文研究』44・45、昭53・6)、森三枝子「平安朝の歌語——その識別意識——」(『相山国文学』2、昭53・2)などの意識は体系なのか規範なのかで扱いかたが変るべきもの。南芳公「接尾語研究の歴史——源氏物語古註における意識——」(『国学院雑誌』80—10、昭54・10)は「めく」「ばみ」の論。源語などの研究史関係は多いが、関係分の中では、安田章「源語研究史における『藻塩草』の位置」(奈良女大『叙説』、昭54・10)ほかがある。立川夏彦「けりがつく」(『国語国文』、昭54・9)も慣用句成立の背景を証する。ほかに拙稿「国語史より見たる古註釈」(熊大『研究と教育』7、昭54・1)。

六

かなづかいについて。

追野虔徳「藤原定家の仮名遣」(『春日和男教授記念語文論叢』、昭53・11)は、定家の仮名遣の原点を問う。結論としては、定家が旧草子を見て、古人がいろはうたの仮名を区別していることを知り(見旧草子了見之)、独自に文字の使い分けを実行したが、むしろ使い分けに主眼があったとする論。植喜代子「藤原定家の変体仮名用法について」(『国文学放』82、昭54・6)は定家のかな文字遣いに関する調査にもとづく研究、「美し」か「親鸞の仮名づかい」(同76、昭53・1)。

クリス・シーリー「三組の仮名イ・キ、エ・エ、ヲ・オ、に對す

る契沖の觀念について」(大阪大『語文』36、昭54・10)は代匠記ではこれらの仮名を發音上の區別として考えようとしたが、説明上の混乱を来して、正濫抄ではこの考えを放棄したと云う。すぐれた見方である。青木恵子「上田秋成の仮名づかいについて」(『東洋大』大学院紀要』15、昭54・2)は靈語通の説が實際のかな使用にどのように反映されたかを見る。林義雄「古言梯の成立と開板をめぐる」(『中田祝夫博士国語学論集』、昭54・2)は、成立から開板までの間に補訂が行なわれた点を証する。

右の他の分野のものから一部をとりあげる。福永静哉「韻鏡開卷の『六対十二反切例』について」(『女子大國文』83、昭53・6)ハ「一連の開卷研究の一、未完Ⅴ。稲垣正幸「釈文雄『和字大観抄』のアクセント」(都留文化大『研究紀要』15、昭54・6)、白木進「かたことの系譜(その一)」(梅光女大『日本文学研究』14、昭53・11)など。

以上で展望を終る。語彙以下紙幅と筆者の能力もあって題目の並列となつてしまつた。他にとりあげるべき論考の見落しもあるかも知れない。また見当ちがいの見解のあるやをおされる。御寛恕のほどをお願いしたい。最後に、文献調査に當つて、格別の便宜をはかつて下さつた国立国語研究所の方々の御好意に、衷心より謝意を表したい。